

本学駅伝プロジェクトの取り組み

Action of J.F. Oberlin University Ekiden Project

武田 一^{※1}

キーワード： 桜美林大学，陸上競技部，大学駅伝，真也加ステファン

はじめに

2012年本学は、スポーツ活動を推進し、学生等の健康の維持・増進等を図ることを目的として、スポーツ推進センター（以下、センター）を発足させた。センターでは、主に特別強化クラブ(2013年現在、10クラブ)の活動支援を行っており、特別強化クラブのミッションは以下3点である。①クラブ活動を通じて教養豊かな見識高い学生となることを目指す。②競技成績向上による大学および学園の一体感およびブランド力の向上を目指す（ONE TEAM）。③「文武不岐」の精神で一般学生の模範となることを目指す。そしてそのミッションを達成するための具体的な目標とタイムスケジュールが提示された¹⁾。

2013年4月、本学は箱根駅伝4年連続2区を走り山梨学院大学の2連覇の中心となった真也加ステファン（旧姓：ステファン・マヤカ）氏を駅伝監督に招聘し本格的に駅伝プロジェクトが発足した。プロジェクトの大きな柱は、「大学および学園の一体感およびブランド力の向上を目指す（ONE TEAM）」ことであり、地域の方を含めてみんなで応援できるチームをつくることを目的としている。理事会では、この目的のもと野球部、アメリカンフットボール部、そして、陸上競技部駅伝チームを中心に全学を上げてサポートすることが決定された。

本研究の目的は、駅伝プロジェクト発足の経緯と現在行われている活動を報告するとともに、2014年度から1期生を迎えるにあたりチーム方針など今後、桜美林らしいチームに育てていくための方策を考察することである。

本学の陸上競技部

本学陸上競技部は、1980年、陸上競技を愛好する有志が学生部長大越孝先生（現・桜美林中高校長）に相談し、顧問（1980-2001）を引き受けていただいたことから歴史が始まった。2002年度より本学に赴任した武田一（文学部健康心理学科→健康福祉学群）がその後、部長と監督を兼任して現在に至っている。

※1 TAKEDA, Hajime 桜美林大学総合科学系

1987年には、第66回関東学生陸上競技対校選手権（男子2部）やり投で雨宮宏史（経済学部4年）が創部初の優勝を遂げた。また、2008年、第87回関東学生陸上競技対校選手権（女子）10000m競歩において須永美穂（健康福祉学群1年）が3位入賞し表彰台に立った。近年では、中村聡（健康福祉学群4年）が3年連続入賞（男子2部：2011年十種競技4位、2012年110mH4位、2013年十種競技7位）を遂げている。しかし、参加標準記録が高いため多くの選手は関東学生陸上競技対校選手権に出場できないのが現状である。そのため、年2回ある他大学との対校戦（八大学、十大学）を大きな目標としている。

クラブ運営については、学生の自主活動を重んじており、部の規則、練習計画などは学生自身が決定実行し、文武不岐の精神で学業成績も高い学生が多いのが特徴である。また、競技力の高い選手や大学で初めて陸上競技に取り組む選手など競技力の異なる選手がいる中、各自が目標を設定し、お互いにアドバイスをしながら少しでも成長できることを目標にしている。そのため、指導者はメンターとして学生の個性を尊重し寄り添うことを心掛けている。



(写真1) 陸上競技部の部員 (2013.08.28 夏合宿)

駅伝への取り組み

駅伝については、武田が就任当時より佐藤東洋士学長（現、理事長）から度々駅伝を行わないかという打診があったが、部員と予算の確保、寮、指導者、練習環境など解決する問題が大きすぎ一教員の対応では不可能であるためスタートしなかった。しかし近年、理

事会で学園全体の一体感を醸成する取り組みとして、しばしば「駅伝」が話題として取りあげられ箱根駅伝を目指す機運は少しずつ高まっていた。

折しも、2012年10月に真也加ステファン氏が所属する大学に解散命令が文部科学省より出される方針との報道があった。経営企画室ではこの機会を捉え、「駅伝チーム」発足の可能性について検討が開始された。2012年12月経営企画室より宮崎光次スポーツ推進センター長（以下、宮崎センター長）と武田宛てに構想の相談を受け、諸課題について協議がなされた。

2013年1月23日（水）、濱健男学園事務局長（以下、濱局長）、志村望理事長室部長（以下、志村部長）、高原幸司学生支援課長の3名が、山梨学院大学を訪問し、陸上競技部上田誠仁監督（以下、上田監督）と面談を行った。上田監督との接点は、志村部長の知人である山梨学院大学就職・キャリアセンター土橋久忠次長の仲介によった。

山梨学院大学陸上競技部は、1977年創部、1985年に上田監督が就任し、同年強化育成クラブ^注に指定された。監督就任当初は選手の勧誘もままならず5000m16分台の選手も在籍していた（現在、各大学は13～14分台の選手がリクルーティングの中心となっている）。2006年に専用陸上競技場が完成したが、それまではロード、公共の陸上競技場を使用して練習を行っていた。寮についても民間のアパートを借り上げるなど何もない状態からのスタートであった。監督就任2年目の1987年、予選会を突破し1988年の箱根駅伝（第63回大会）に初出場してからは、箱根の常連校となり今日に至っている。ケニアからの留学生をリクルーティングしたのも初の試みであった。1992年（第68回大会）には最初の留学生オツオリ選手を擁し初優勝。その後、ステファン・マヤカ選手が在籍した1994年、1995年に2連覇（第70回、71回大会）を遂げている。駅伝チーム発足当時は、本学同様、選手、サポートなど何もない状態からのスタートであり、箱根常連校としてチームを作り上げた上田監督からのアドバイスは大いに参考となった。

2013年2月7日（木）、濱局長、志村部長から上田監督との面談の報告を宮崎センター長と武田が受けた。内容は、上田監督が就任した時の状況や目標、その他必要条件（監督・コーチの就任、部員の確保、寮の整備、食事の提供、合宿費の補助、運営費、リクルーティングの状況など）、駅伝のメリット（桜美林大学は社会的評価が高いため注目されることなど）、そして駅伝監督の候補に真也加ステファン氏を推薦されたことなどであった。加え、学園として提供可能なこととして、指導者の確保、設備関連の整備、諸経費の経常などが報告された。この報告を受けて次回の会議に具体的なプランを武田が提案する運びとなった。

2013年2月7日（木）、前会議を経て経営企画室にて本学が箱根駅伝を目指すために最低限必要な条件について上田監督からのアドバイスをもとに、より具体的に武田が説明した。内容は、箱根駅伝とは（本選、予選会の構成など）、20kmを走るとは？（練習内容、栄養、休息など）、選手のリクルーティング（人数と選手の目標など）、指導者（本学のミッションを理解し実行できるかなど）、練習環境などとその問題点と解決案であった。そして、駅伝強化は大学直轄で支援すること（予算の確保）、本学のミッションを理解し実行でき

るプロコーチを採用すること（教員が監督を兼任する時代ではない）、練習環境・寮の整備が不可欠なことがあげられた。また、目標については、予選会出場が良いという中途半端なことではなく、時間がかかっても箱根駅伝出場、そして入賞するという高い目標を持ち本気で取り組む姿勢があるのかを確認した。最後に、駅伝強化の目的を確認したところ、濱局長、志村部長からは、学生募集が目的ではなく、大学および学園、地域の一体感およびブランド力の向上を目指すことで、大学に活力を与え、母校愛を育てることであると話された。その目的の上、駅伝部として独自の活動をするのではなく、陸上競技部の一部として駅伝チームの強化がスタートした。

2013年2月28日（木）、陸上競技部の強化（駅伝）についての会議が開かれ、指導者として真也加ステファン（創造学園大学陸上競技部監督）氏が候補者としてあげられた。理由は、指導者として国内外での実績（箱根駅伝予選会出場2回、関東学生陸上競技対校選手権大会男子2部5000m優勝2名：大会新記録更新1回、北京オリンピック男子マラソン金メダリストサムエル・ワンジル選手へのサポート、ケニア陸連コーチングスタッフなど）、選手としての実績（箱根駅伝2区4年連続出場：区間賞2回、札幌国際ハーフマラソン3連覇：大会新）、国際人としての活躍（ケニア陸連コーチングスタッフ、IAAF国際陸上競技連盟エージェント資格取得など）があげられた。真也加氏が指導することにより、競技力の強化に加え、本学のミッション、教養ある国際人を育成することに大いに貢献できる本学にふさわしい人材であると判断した。また、他にコーチ1名（今後の検討課題）の確保、施設・設備の手当て（練習場所は近隣の公共陸上競技場を使用、寮については当初卒塚寮を予定していたが第二国際寮に変更）、リクルーティング（大学特別選抜による12名の確保、特待生制度の整備、高校指導者との情報交換を全国的な規模で展開）、諸経費、そして、目的として以下3点あげられた。①駅伝をとおして、健全な肉体と精神をもった学生を育成する。②「箱根」を目指すことにより、在学生の一体感醸成の一助とする。これは在学生のみならず卒業生、地域を含め「All Oberlin」の涵養につながる。③競技の結果は、本学のプレゼンス向上となる。

2013年3月1日（金）、宮崎センター長、濱局長、志村部長、武田の4名が山梨学院大学に赴き、上田監督に真也加氏の監督就任の要請をお願いしたところ、快諾し真也加氏へ働きかけを約束していただいた。また、カレッジスポーツセンターやスポーツ施設の視察も行い、オリンピック選手を多数輩出している山梨学院大学のスポーツ強化のシステムも学んだ。

2013年3月13日（水）、真也加氏が本学を訪問し諸条件の確認と面接が行われた。上田監督、佐藤東洋土理事長、三谷高康学長、宮崎センター長、濱局長、志村部長、武田が出席した。諸条件として前回会議の内容を提示し、真也加氏に今後の活動方針など質問を行った。当初、困惑気味であった真也加氏は、上田監督より「箱根（駅伝）に出た留学生が（箱根駅伝の）監督として出たら初めてだ。チャレンジしないか」と後押しをされ、監督就任を了承された。後日、何故、困惑気味だったのかと問うと「ポーランドから帰国し

たばかりで、状況が把握できていなかったのでは…」と語っていた（第40回世界クロスカントリー選手権大会でケニアのコーチとして帯同）。筆者は、真也加氏の表情から駅伝監督就任要請を断られるのではと内心心配していた（写真2）。



（写真2）駅伝監督就任。筆者と（2013.3.13 理事会議室にて）

2013年3月23日（土）本学園定例理事会にて野球部、アメリカンフットボール部、陸上競技駅伝の代表者が活動報告、今後のプランなど発表した。野球部は宮崎光次部長（健康福祉学群教授、スポーツ推進センター長）、アメリカンフットボール部は関口順久ヘッドコーチ（スポーツ推進センター員）そして陸上競技部駅伝については志村部長が説明をおこなった。また、この会議において4月から駅伝の強化と真也加ステファン氏の駅伝監督就任に加え野球部、アメリカンフットボール部の3クラブを強化していくことが報告された。

3月27日（水）特別強化種目認定委員会において陸上競技部駅伝が特別強化クラブ（Aランク）に認定され正式に特別強化クラブとしてスタートした。

（注）強化育成クラブ：1996年に設立された大学直轄の組織、山梨学院カレッジスポーツセンターが優秀な選手や指導者の確保、施設設備の整備など様々な面で組織的なバックアップを行っている。また、カレッジアスリート支援体制としてスカラシップ制度、学習支援、指導者への支援、競技向上のための環境整備、医療支援などサポートシステムを整えている²⁾。

真也加ステファンのプロフィール

ここで、真也加ステファン駅伝監督（以下、真也加監督）のプロフィールを述べていく。

1972年11月27日ケニアのKisiiで9人兄弟の7番目として生まれる。本名、ステファン・マニャンゲ・マヤカ。クリスチャンである。Kisiiは、ケニア西部（首都ナイロビから直線距離約300km、車で5～6時間）の小さい町でKisii High Land（標高約2,000m）と言われる丘と山の緑豊かな町で平地はほとんどない。産業は、農業（トウモロコシ、お茶、バナナ、パイナップルなど）が中心で、他にレンガ作り、Kisii Stoneを使った置物のお土産が有名である。また、長距離走が盛んな町である。真也加監督の実家は、農家で現在は2番目の兄が継いでいる。山梨学院大学の先輩、ジョセフ・オツオリ氏（ケニアから初の留学生、2006年ケニア帰国時に自動車事故で急逝。山梨学院川田「未来の森」運動公園にメモリアルモニュメントが設置）、山梨学院大学在校生のエノック・オムワンバ選手（2年生）もKisiiの出身である。

小学校、NYAGESA Primary School（1～8年生）（写真3）は、小山の頂上にあり実家の目の前である。靴はなく裸足で生活していた。移動は全て徒歩であり買い物に行くのも片道6～7km歩いて行った。また、毎日、朝晩、丘下の水場からの水汲みは子供の役割であり水汲みを怠ると食事が作れないので必ず行っていた（写真4）。小学校の校庭は、当時、丘を切り開いただけの斜面にあった。そのため、ボールが転がったり遊びにくかったが、後年、真也加監督の計らいで平らに整地された。また、Kisiiを訪れた時は、勉強道具、ボールなどを提供するボランティアを行っている。



（写真3）母校の小学校前で先生方と（2013.8.16）



(写真 4) 水を運ぶ少女たち (2013.8.21)

高校、KIOMITI Secondary School (1～4年)は、実家から30km程離れており高校の近くに下宿していた。移動はすべて徒歩のため実家へはたまにしか帰宅しなかった。サッカーなどスポーツが好きな活発な生徒であった。Kisiiは、クロスカントリーレース(以下、クロカン)が盛んでシーズンになると長距離走の練習をし、その才能が芽生え始めた。練習と言っても時計も無く、距離も分からず、指導者もいないため自分の意思でただ単にどこどこまで行って帰ってくるという野外走であった。しかし、そこは約2,000mの高地であり平坦のない起伏の多い天然のクロスカントリーコース、そして、湿度の低い高原のため、走るのには最適な環境であった。子供のころから裸足で丘を上がり下がりし移動は徒歩(とにかくケニア人はよく歩いている)で基礎体力がついた上で、自分のため家族のために走るハングリーさがケニアランナーの強さと思われる。環境について補足すると、ケニアは赤道直下であるが、標高が高いため一年中湿度が低く温暖でとても過ごしやすい気候である。昼間は日差しが強いが湿度が低いいため汗もほとんどかかず、朝晩は長袖が必要なほど涼しくなる。日本人のイメージするケニアはマサイ族が住むサファリの草原であるがそれはケニアの一部にすぎない。また、虫もほとんどいないため快適であった。

訪日するきっかけは、留学生のリクルーティングに上田監督がケニアを訪れたことである。Kisiiのクロカンで優勝をしていたため高校の先生がオツオリ選手に推薦し、ナイロビでトライアルの誘いを受けたのが、2年生の時であった。3人で走ったセレクションの結果、山梨学院大学附属高校の3年生に留学生として編入が決まった。1990年12月に来日。あまりの寒さに驚き嫌な思い出が日本の第一印象であった。翌年の箱根駅伝でオツオリ選手(3年,2区区間賞)の走りを見学。初めて見た箱根駅伝(駅伝は日本独自の文化)では、沿道の人のに非常に驚いた。翌年1992年(第68回大会)オツオリ選手の活躍もあり山梨学院大学は初優勝をとげる。

付属高校での生活は、正規の授業の他に日本語学校にも通い、その後、大学生と練習するハードなスケジュールだった。二人で来日したが、一人は耐えきれずすぐに帰国。来日当初、今のような携帯電話もないため話し相手もなくホームシックにかかり布団の中で泣くことも多かった。その時、今は我慢するしかないと言いつけさせ、音楽を聞いたり、やることは練習しかないと言いつけさせることに没頭した。唯一の楽しみは、日本語学校で休み時間の合間にインド人と英語で話すことだけだった。また、オツオリ選手に精神面、生活面で助けってもらったことをとても感謝している。

1992年山梨学院大学商学部に入學。その素質は、上田監督により開花されることになる。

1年生の箱根駅伝では、コースに慣れてなかったため緊張しペースがバラバラになり、前の選手を追いかけることだけを考えていた。適当に走ったというのが本音であった(区間賞)。初めての箱根駅伝では試走が一番つらく、夜中3時に山梨を出発し、途中車内で仮眠をとり、5時に鶴見中継所から寒さに震えながら4時間ぐらい歩いてポイントを確認した。2年生の時は、コースに慣れてきて自信があったため自分でレースプランを立て走った結果が区間タイ記録になった。3年生の時は、2週間前にくるぶしを怪我し直前に長い距離を走る練習ができなく万全ではなかったが渡辺康幸選手(早稲田大学)との勝負を楽しみにして走った(区間新であった渡辺選手が区間賞のため区間2位)。4年生の時は、11月にした怪我が長引きレース前1カ月走れず、自転車での練習だった。ほとんどぶっつけ本場のレースは、できることなら出たくなかったがチームのために走った(区間3位)。箱根駅伝では、最長距離のエース区間(現在は5区山登りが最長区間)花の2区を4回走ったが、実は、3,4年では異なる区間、特に5区を走りたかったという。

箱根駅伝の記憶が鮮明であるが、一番活躍した駅伝は出雲駅伝であった。4年間、最長のアンカー区間で区間賞をとり逆転優勝を何度も遂げたためその6区(現在はコースが変更されている)はマヤカロードと呼ばれている。

卒業後、ダイエーで活躍するも経営不振から廃部となり、1998年日立電線に移籍。そして、実業団対抗駅伝などで活躍するも2006年3月に現役生活を引退した。

主な戦歴は以下のとおりである。

表1 大学3大駅伝の成績

年	出雲駅伝 (10月開催)				全日本大学駅伝 (11月開催)				箱根駅伝 (1/2.3開催)			
	大会回数	区間	成績	チーム順位	大会回数	区間	成績	チーム順位	大会回数	区間	成績	チーム順位
1992	4	6	区間賞	優勝	24	8	区間賞 (区間新)	2位				
1993	5	6	区間賞	優勝	25	3	2位 (区間新)	4位	69	2	区間賞	2位
1994	6	6	区間賞	優勝	26	1	2位 (区間新)	2位	70	2	区間賞 (区間記録タイ)	優勝
1995	7	6	区間賞	優勝	27	8	2位 (区間新)	3位	71	2	2位 (区間新)	優勝
1996									72	2	3位	途中棄権

表2 ベスト記録

距離	タイム	年
5000m	13分50秒08	1994
10000m	28分01秒48	1996
ハーフマラソン	61分6秒	1995
マラソン	2時間19分11秒	2005

表3 個人種目の成績

	大会名	種目	成績	所属
1991	第7回日本ジュニア選手権	5000m	2位	山梨学院大付属高校
1992	第61回日本学生陸上競技対校選手権大会	5000m	4位	山梨学院大学
		10000m	2位	
	第71回関東学生陸上競技対校選手権大会	(2部) 5000m	優勝	
		(2部) 10000m	優勝	
1993	第17回ユニバーシアード バッファロー大会	10000m	4位	
	第77回日本陸上競技選手権大会	10000m	優勝	
	第62回日本学生陸上競技対校選手権大会	10000m	優勝	
	第72回関東学生陸上競技対校選手権大会	(2部) 5000m	優勝	
		(2部) 10000m	優勝	
1994	第78回日本陸上競技選手権大会	10000m	7位	
	第63回日本学生陸上競技対校選手権大会	10000m	優勝	
	第73回関東学生陸上競技対校選手権大会	(2部) 5000m	2位	
		(2部) 10000m	優勝	
1995	第18回ユニバーシアード 福岡大会	10000m	2位	
	第79回日本陸上競技選手権大会	10000m	7位	
	第64回日本学生陸上競技対校選手権大会	10000m	優勝	
	第74回関東学生陸上競技対校選手権大会	(2部) 5000m	優勝	
		(2部) 10000m	優勝	
	第38回札幌国際ハーフマラソン	ハーフマラソン	優勝(大会新)	
1996	第80回日本陸上競技選手権大会	10000m	8位	ダイエー
	第44回全日本実業団対抗選手権大会	10000m	2位	
	第39回札幌国際ハーフマラソン	ハーフマラソン	優勝	
1997	第40回札幌国際ハーフマラソン	ハーフマラソン	優勝	日立電線
1998	第41回札幌国際ハーフマラソン	ハーフマラソン	3位	

1999年12月盛山玲世(第5回世界陸上競技選手権大会イエーテボリ女子マラソン代表)と結婚。現在、小学校6年生の長女と1年生の長男に恵まれている。

2005年8月に日本国籍を取得し真也加ステファンと改名。2006年4月より創造学園大学陸上競技部のコーチ、2009年には監督に就任。箱根駅伝予選会には2008年(28位/45チーム)、2009年(30位/47チーム)に2回出場。しかし、創造学園大学の経営が悪化したことにより選手のリクルーティングができない中、経費の削除、選手の怪我などからチーム状況は悪化していった。2011年に自費で迎え入れたケニアからの留学生ジョセフ・オンサリゴ(1年生:現在、南陽市役所に所属)選手が第90回関東学生陸上競技選手権大会男子2部5000mにて優勝。2012年には、ウィリアム・マレル(1年生:現在、ホンダに所属)選手が第91回関東学生陸上競技選手権大会男子2部5000mにて大会新で優勝した。そして、2013年3月に最後の卒業生を送り出し創造学園大学を去ることとなった。

また、競技や指導のかたわら日本にいるケニア選手のサポートも行っている。2008年北京オリンピック男子マラソン金メダリスト、サムエル・ワンジル選手(トヨタ自動車九州)も真也加監督のサポートが大きかった。加え、ケニア代表チームのコーチとしても活躍していた。日本陸上競技連盟のケニア視察なども真也加監督なしではできなかった。現在は、日本とケニアの懸け橋となっている。

2013年4月以降の取り組み

最大の課題は、長距離部員が所属しないため選手の確保であった。真也加監督の就任が4月1日のためそれ以前にリクルーティング活動が全くできなかった。そのため、本学が駅伝の強化に取り組んでいることを高校生、指導者の方にどの様に周知するかが問題となった。この点は、入試広報センターの全面的なバックアップにより、真也加監督の就任記者会見と陸上競技の専門誌に取材依頼することとなった。

4月12日(金)陸上競技マガジン(ベースボールマガジン社)の取材を真也加監督が受けた。陸上競技マガジンは中高生やその指導者が多く購入している専門雑誌である。取材内容は、真也加監督の就任のいきさつ、チーム作り、練習環境、大学のサポート体制などであった。三谷学長も取材を受けていただき全学を挙げての取り組みであることを強調された。この記事は、6月号にトップページ見開きで掲載され反響を呼んだ。これは、陸上競技マガジン高橋克実編集長のご配慮でトップスター桐生選手(100m10秒00を出した高校生)の記事に先立ちトップページに掲載されたことを付け加える。

4月22日(月)入試広報センター尾崎広報部長の発案で本学四谷キャンパスにて「桜美林大学新駅伝監督就任発表記者会見」(写真5)を行った。当日は、陸上競技関係の雑誌、一般紙の新聞記者、スポーツ紙の記者等24名が集い、翌日には65社以上のメディアに取り上げられた。三谷学長から本学の歩みとスポーツ活動について、武田から長距離強化

に向けた指導体制，そして，真也加監督の紹介と挨拶，フォトセッション，質疑応答を行った。多くの記事は好意的に取り上げられた。その後，掲載記事は100以上に及んだ。

この2つのイベントにより全国規模で本学や真也加監督の指導方針などが少しずつ周知されてきた。そして，リクルーティングで初めて会う指導者の方ともスムーズに話られるケースが多くあった。その後も取材の要請が途切れることなく続いていることからこのイベントは，大成功であり幸先の良いスタートとなった。



(写真5) 桜美林大学新駅伝監督就任発表記者会見 (2013.4.22)

4月12日(金)，宮崎センター長，濱事務局長，志村部長，真也加監督，武田5名は，上田監督に真也加監督就任の報告とお礼のため山梨学院大学を訪れた。そして，山梨学院創立60周年事業で2006年に竣工した川田「未来の森」運動公園にある陸上競技場(オールウェザー6レーン)，2kmの周回コースとクラブハウスなど付帯施設の視察も行った。100人を超える選手たちが整然と練習に励む姿が印象的であった。また，付属高校の選手も練習しており上田監督が随時アドバイスをを行う一貫した練習環境であった。

その後は，全国各地へのリクルーティング活動が中心となった。現在，長距離部員がないため来年(2014年)の予選会出場には，10名以上の新入生が入部することが最低条件である。予選会は，10～14名の標準記録突破者(期限内で5000m16分30秒以内または10000m34分以内のトラックでの公認記録)のエントリー，当日は10～12名の出場で上位10名の合計タイムで競われる。近年，長距離選手のリクルーティングは過熱を極めており多くの有力選手は2年生の時点で進路が決まっている。また，速いタイムを持っている選手ほど有力駅伝校に行きたがるため新規参入校への入学希望者はほとんどいないのが現状である。その中で活動は，困難を極めなかなか選手の確保は出来なかった。

4月20日(土)～21日(日)の兵庫リレーカーニバルを皮切りに週末は小さな競技

会から都道府県大会，地区大会，全国大会，そして平日は高校を訪問した。加え，留学生のリクルーティングの事前準備のため真也加監督は，6月30日（日）～7月22日（月）ケニアに向かった。そして，真也加監督と武田は8月14日（水）～24日（土）ケニアへ最終候補者選定の試験（5000m タイムトライアル）と面接のために赴いた（写真6）。ケニアからの留学生のメリットは，その高い競技力もあるが日本人選手への影響力が最も大切であると考え，言葉も分からない日本に来て共同生活をするによりお互いに異文化理解をして教養ある国際人になることが望まれる。ケニアでの移動手段は車が一般的である。移動に1日費やしトラブル（パンク，故障などがおこると1～2日がかかりとってしまう）は日常茶飯事であるため予定通りに行かないことが多い。また，留学生のリクルーティングにあたり様々な場所で多くの方に直接会い話し食事をするのがケニアンスタイルであるためどうしても日数がかさんでしまうのが現状であった。



（写真6）ケニア Kisii でのタイムトライアル（2013.8.20）

8月13日（火）八王子市立上柚木公園陸上競技場を貸し切り，セレクションを行った。当日は内定した1名を含む本学希望者3名で2000mと1000mのタイムトライアルを行った。加え，近隣の高校の指導者に声をかけ練習会を催した結果，200名近くの選手が集まり本学を知ってもらえる良い機会となった。

真也加監督は忙しい合間を縫ってイベントに本学のユニフォームで参加し広報活動もしている。6月1日（土）Run for AFRICA 2013（横浜：日産スタジアム）アフリカ支援を目的としたチャリティランニングイベントにアフリカチームの一員として参加。10月10日（木）東京都町田市立第二中学校でランニングクリニック（ケニアの紹介した異文

化理解教育も含む)。11月4日(月)第8回鏡石駅伝・ロードレース大会(福島県鏡石町)ではゲストランナーで駅伝を走り、ランニング教室も開催。

次に寮についてである。駅伝チームの練習は毎朝6:00くらいから10~20km走り、きちんと朝食を取る規則正しい生活をするのが必須条件であるため集団生活ができる寮は無くしてはならない。今回、駅伝チームは第2国際寮(淵野辺駅南口)の世帯部分(3DK,バス,トイレ付)に入寮することになった。2階部分を食堂兼ミーティングルームとし選手は3~6階部分に入寮する予定である。当初、卒塚寮(ワンルーム)を予定していたが、視察した真也加監督から「ワンルームは贅沢すぎる。社会人になってからで十分である。個室ではハングリー精神が育たない。出てくるだろうトラブルを皆でコミュニケーションを取りながら乗り越えていくことが大切。そして、卒業の時に桜美林で良かったという思い出をつくって欲しい。」と言われ寮の選定は白紙に戻った。その後、第2国際寮が候補として挙がり、世帯寮での集団生活が可能なおことと一般の留学生との交流もできるため決定した。近隣は住宅街で、近くに鹿沼公園、淵野辺公園があるため練習環境として整っている場所にある。

留学生を受け入れるにあたり、以下のような取り組みが進んでいる。本学では日本語が未修得の留学生に対し、考察日本(RJ:Reconnaissance Japan)というプログラムが用意されている。これまで、短期留学生では受け入れているが、正規の学生としては初めてである。今回のケースは、今後本学も日本語が未修得の留学生を受け入れるにあたりパイロットケースとなる。現在、基盤教育院足立匡行センター長を中心にサポート体制を整えている。1年次は日本語教育を中心に行い2年次以降日本語の授業を履修することが目標である。そのため、入学前教育として、基盤教育院では日本語教育のテキストを選定し、自習学習ができるように準備している。また、2013年4月に発足したインターナショナル・インスティテュート(英語や中国語による授業を中心としたプログラム)、ライティング・サポートセンター(WSC)も留学生にとり有効なシステムである。また、日本人学生と寮生活を送るため、学生同士、日本語、英語の学習をしコミュニケーションをとり、異文化理解教育を行う予定である。

陸上競技部の指導ポリシー

指導ポリシーは、本学の教育目標をもとに以下のとおりである。「社会に貢献するための人間形成づくりを目指し、教養ある国際人を育てます」キーワードとして、「Believe and Do」「学而事人」「せん方つくれども望みを失わず」「文武不岐」「笑顔であいさつ」の5つを掲げている。「Believe and Do」は、真也加監督が好んで色紙に書く言葉であり「自分を信じること、仲間を信じること、そしてチャレンジすること」の大切さを説いている。「学而事人」(学んだことを人々や社会のために役立てる)と「せん方つくれども望みを失わず」(どんな困難にもめげず、希望をもって生きる)は学園創設者清水安三のアイデンティ

ティーである。「文武不岐」(文と武は分かつ)は、スポーツ推進センターのミッションであり一般生徒の模範になることを目指している。最後の「笑顔であいさつ」は武田から、挨拶からコミュニケーションは始まる。それも形だけの挨拶ではなく、心の底から相手を受け入れることの大切さを説いている。そして、安三の甲子園への夢の句から「夢を見よ 夢は必ず成るものぞ うそと思わば箱根にきけ」と受け継ぎ指導ポリシーとしている。箱根駅伝出場は、夢のまた夢。しかし、どんな状況でも希望を失わず、自分を信じてチャレンジする学生に育ててほしいという願いがある。また、そのような学生が、この日本をより豊かな国へ変える原動力になると確信している。

次に、真也加監督の陸上競技に対する指導ポリシーを述べる。まず個人種目で力を伸ばすことを大切にしており、個々が強くなった結果、チーム力があがり箱根駅伝の出場につながると考えている。真也加監督には世界選手権やオリンピックで活躍できる選手を育てたいという夢があり、箱根駅伝は目標の一つで通過点であり、社会に出てからが本当に活躍するときであると考えている。そのため練習方法も個々に合わせて行う予定でいる。多くの大学では、箱根駅伝を最終目標としてとらえ、集団練習が中心の傾向にある。また、箱根駅伝で活躍した選手が社会人になってから力を発揮できないケースも多く、近年、オリンピック、世界選手権代表選手は箱根駅伝で注目されなかった選手が多い。海外でも活躍した真也加監督の考えは、国際標準として当たり前であるが、本学の取り組みは日本の大学ではまれなケースとなると考える。

また、本学陸上競技部は、日本とケニアの文化を取り入れることにより学生が成長することを目標としている。それは、日本人の真面目できちんとし、暑さ寒さにも耐えられる我慢強い性格に加え、ケニア人のコミュニケーションを大切にし、今を見つめて明るくチャレンジする姿勢である。ともすると、日本人は過去と未来を考えて計算するため「私には出来ない」「明日の練習があるからセーブしよう」と安全志向になりがちで、自分の意思をはっきり伝えないため形だけの練習になってしまうこともある。また、ケニア人は今を生きるため「ペースがコントロールできない」「将来のことを考えない」傾向のためすぐあきらめることもある。これら長所と短所を知りお互いに良いところを学んで成長してほしい。

リクルーティングにおいて、以上の指導ポリシーを説明した上で、選手に将来の夢を聞きそれが本学で叶えられるか、箱根は目標であって終着点ではないこと、大学を出てからが大切であるため学業もしっかりやることなど確認し同意した選手を大学特別選抜(スポーツ)に推薦している。

おわりに

本年4月から始まった2014年入学生のリクルーティングはほぼ終わり、来年度予選会初出場の見通しもたちつつある。これも入試広報センターはじめ様々な方々のサポートの

おかげである。山梨学院大学時代のチームメイト、実業団の方々が熱心に動いていただくのを見て真也加監督の人脈人望の厚さをこの半年で感じた。

2014年4月より新入生が入学し駅伝チームが始動する。本学の挑戦は始まったばかりである。この駅伝チームのチャレンジについて多くの教職員の方や卒業生、退職された先生方から励ましがあがり期待がかかっていることをひしひしと感じる。本学裏の尾根緑道で毎朝練習をする真也加監督にも近隣の方から熱く励ます声かけられている。リクルーティング先で知り合う方々も桜美林のチャレンジを応援し見守っている。

本プロジェクトの真の目的は、みんなで「夢」を本気で追うことだと考える。それは、学園創立者清水安三の生き方そのものであろう。安三は「ほらやす」と言われたほど「夢」を持った人物であった。敗戦後、北京の崇貞学園を失い、失意の中で帰国。しかし、「せん方つくれども望みを失わず」の精神でお金も生徒も何もない中、桜美林学園を設立。当時、町田のこの地に広がる麦畑を指さし「白い校舎が見える」と「大学をつくる夢」、高校野球にのめり込み弱小野球部に「夢を見よ 夢は必ずなるものぞうそと思わば甲子園にきけ」と「甲子園で優勝する夢」。それは、誰もが実現できないだろうと笑われた夢であった。安三が持ち続けた「夢の学園、桜美林学園」。今、再び、チャレンジする桜美林がAll Oberlinで夢をかなえるため走り出した。桜の花は厳しい冬の寒さを越えてはじめて花が咲く。箱根路でJ.F.Oberlinのユニフォームがたすきをつなぎ、みんなで応援するチームに育てるのが筆者の夢である。

最後に、山梨学院大学上田誠仁監督の温かい助言とサポートのおかげでこの駅伝プロジェクトがスタートできましたこと感謝いたしております。

引用・参考文献

- 1) 武田一：清水安三と体育・スポーツ、桜美林論考「自然科学・総合科学研究」第4号、(2012)
- 2) 山梨学院カレッジスポーツセンター：勇者の詩 Soul of Champion, Vol2, (2011)
- 3) 生島淳：監督と大学駅伝、日刊スポーツ出版社、(2008)
- 4) 陸上競技マガジン 1991年8月号、ベースボールマガジン社、184, 185 (1991)
- 5) 陸上競技マガジン 1992年12月号、ベースボールマガジン社、136, 137 (1992)
- 6) 陸上競技マガジン 1993年2月号、ベースボールマガジン社、162 (1993)
- 7) 陸上競技マガジン 1993年7月号、ベースボールマガジン社、251 (1993)
- 8) 陸上競技マガジン 1993年9月号、ベースボールマガジン社、99, 112, 235 (1993)
- 9) 陸上競技マガジン 1993年11月号、ベースボールマガジン社、92, 135, 136 (1993)
- 10) 陸上競技マガジン 1993年12月号、ベースボールマガジン社、173, 192, 193 (1993)
- 11) 陸上競技マガジン 1994年2月号、ベースボールマガジン社、135, 176 (1994)
- 12) 陸上競技マガジン 1994年7月号、ベースボールマガジン社、64, 245 (1994)

- 13) 陸上競技マガジン 1994年8月号, ベースボールマガジン社, 139 (1994)
- 14) 陸上競技マガジン 1994年11月号, ベースボールマガジン社, 76, 134 (1994)
- 15) 陸上競技マガジン 1994年12月号, ベースボールマガジン社, 100, 115, 116 (1994)
- 16) 陸上競技マガジン 1995年1月号, ベースボールマガジン社, 186-201 (1995)
- 17) 陸上競技マガジン 1995年2月号, ベースボールマガジン社, 142, 174, 186 (1995)
- 18) 陸上競技マガジン 1995年7月号, ベースボールマガジン社, 51, 52, 244 (1995)
- 19) 陸上競技マガジン 1995年8月号, ベースボールマガジン社, 14, 24 (1995)
- 20) 陸上競技マガジン 1995年10月号, ベースボールマガジン社, 55, 56, 69 (1995)
- 21) 陸上競技マガジン 1995年12月号, ベースボールマガジン社, 150 (1995)
- 22) 陸上競技マガジン 1996年1月号, ベースボールマガジン社, 188 (1996)
- 23) 陸上競技マガジン 1996年2月号, ベースボールマガジン社, 164, 176 (1996)
- 24) 陸上競技マガジン 1996年7月号, ベースボールマガジン社, 143 (1996)
- 25) 陸上競技マガジン 1996年9月号, ベースボールマガジン社, 272 (1996)
- 26) 陸上競技マガジン 1996年11月号, ベースボールマガジン社, 97 (1996)
- 27) 陸上競技マガジン 1997年2月号, ベースボールマガジン社, 138, 163 (1997)
- 28) 陸上競技マガジン 1997年9月号, ベースボールマガジン社, 256 (1997)
- 29) 陸上競技マガジン 1998年2月号, ベースボールマガジン社, 63, 64 (1998)
- 30) 陸上競技マガジン 1998年6月号, ベースボールマガジン社, 106 (1998)
- 31) 陸上競技マガジン 1998年11月号, ベースボールマガジン社, 78 (1998)
- 32) 陸上競技マガジン 1999年1月号, ベースボールマガジン社, 165 (1999)
- 33) 陸上競技マガジン 1999年2月号, ベースボールマガジン社, 66 (1999)
- 34) 陸上競技マガジン 1999年6月号, ベースボールマガジン社, 104 (1999)
- 35) 今村忠: 甘口辛口, サンケイスポーツ, 4月24日 (2013)

要約

2013年4月, 本学は大学駅伝で活躍した真也加ステファン (旧姓:ステファン・マヤカ) 氏を駅伝監督に招聘し本格的に駅伝プロジェクトが発足した。プロジェクトの大きな柱は, 「大学および学園の一体感およびブランド力の向上を目指す (ONE TEAM)」ことであり, 地域の方を含めてみんなで応援できるチームをつくることを目的としている。

駅伝プロジェクト発足の経緯は, 理事会で学園全体の一体感を醸成する取り組みとして, 「駅伝」が取りあげられ箱根駅伝を目指す機運は高まってきたことから始まった。そして, 2013年1月に濱健男学園事務局長, 志村望理事長室部長, 高原幸司学生支援課長が山梨学院大学上田誠二陸上部監督を訪れ面談を行ったことから具体的にスタートした。その後, 学園が本気で取り組むことを前提に真也加監督のもと長距離選手のリクルーティングを行い, 10月の時点で2014年の箱根駅伝予選会初出場の見通しが立ってきた。また, ケニ

アからの留学生を迎えるにあたり大学全体でのサポート体制も整いつつある。

指導ポリシーは、本学の教育目標をもとに「社会に貢献するための人間形成づくりを目指し、教養ある国際人を育てます」であり、キーワードとして、「Believe and Do」「学而事人」「せん方つくれども望みを失わず」「文武不岐」「笑顔であいさつ」の5つを掲げている。

学園創立者清水安三が持ち続けた「夢の学園，桜美林学園」。今，再び，チャレンジする桜美林が All Oberlin で夢をかなえるため走り出した。